

レベントアートの妖精使い
— 海の章 —



He is a Friend of Fairies. / She is a Fairy of Wind.



He and She are Traveling in Faraway Arcadia.



レベントートの妖精使い

楽園のあちこちを旅して回る一人の旅人の噂は、静かに広まっていた。

見た目は何ということもない、どこにでもいるような青年だ。

彼は遺跡を荒らす墓暴きでもなければ、悪党を追い詰める首狩りでもない。言葉通り物見遊山を目的とした「旅人」であり、それ以上でもそれ以下でもない。

だが、彼は自然と人の間で噂に上るようになった。

曰く、彼が通った道には涼風が舞う。

曰く、彼に触れられた植物は生気を取り戻す。

曰く、彼の前には闇すらも身を退ける。

曰く、彼の目には何もかもが見えている。

曰く……彼の友は楽園全ての妖精や精霊である。

故にかの旅人は故郷の名を取ってこう呼ばれる。

『レベントートの妖精使い』……と。

目次

- 01 瓶詰めの船
- 02 竜王遊び
- 03 羅針盤
- 04 アクアマリン
- 05 人魚姫
- 06 砂クジラ
- 07 七つの海
- 08 幽霊船
- 09 大陸横断橋
- 10 セント・エルモの火

01：瓶詰め船

お前がこの手紙を読んでいるということは、俺は既に楽園を去った後なのだろう。

そして、「お前が」この手紙を読んでいるということは、俺の願いが一つを除き全て叶ったということなのだろう。

俺は楽園一の幸せ者だと思う。お前は「何言ってんだ」とすごく嫌な顔をすると思うが、本当に嫌な顔をしてはいないだろうな、ここまで俺の想像通りだったら、世界樹の向こうから笑ってやる。

お前は俺のことが嫌いだったろうし、多分今も嫌いなのだと思う。それでも一つだけ、お前にどうしても叶えて欲しいことがあるから、この手紙を残そうと思う。もちろん、俺の願いを叶えるかどうかはお前次第、お前が望まなければこの手紙は焼き捨ててくれて構わない。

俺の願い、それは――

「そいつは、本当に最悪な野郎でな」

レベントートの妖精使いは、横に浮かぶ相棒の『風』に向かって、ぶつぶつと文句をたらし続ける。その右手には封筒に入った手紙がぐしゃぐしゃになって握られていた。

「唐突に現れて俺の神経逆撫でしまくった挙句に、何もかもを全部押し付けて消えちゃった。消えた挙句にここに来て願い事なんて寝ぼけたこと言ってやがる、マジふざけんじゃねえ。ありえねえっつの」

「……でも、律儀に叶えてやろうとする辺りがホントお人よしよね、アンタって」

『風』は小さく溜息をつきながら、妖精使いの頭の上の枝を払ってやる。妖精使いは「悪いな」と『風』に目配せして、目の前に立ちはだかっていた茂みを左手に握っていた短剣で切り払う。

二人は緑深い森の中にいた。何故こんな場所にいるのかといえば、妖精使いの手に握られた手紙に、この場所が指定されていたからだ。

書き手本人も理解しているようだったが、妖精使いは本当にこの手紙の書き手が「嫌い」だった。それ以外に何と表現のしようもない。ネガティブな感情を全てずだ袋に詰め込んで、その袋で殴り倒したくらいには嫌いだった。

ただ……好意の反対語が無関心であるように。嫌悪を覚えながら決して妖精使いはこの男に「無関心」にはなれなかった。

「お人よし、ってよりも、どうしても気になっちゃうんだ」

「何が？」

「奴が、何を残したのか。俺は奴が大嫌いだが、奴は決して無意味なことはしない。最低でも、俺をからかうためだけにこんな手紙を書いたりはしない奴だ」

それだけは、はっきりと言える。

妖精使いの言葉に、『風』は「へえ」と呆れたように息をついてみせた。

「それだけ聞くと、仲いいように聞こえるんだけど」

「奴は俺を嫌っちゃいなかったと思うぞ、俺が一方的に嫌ってただけだ……っと、ここかな」

妖精使いは森の中でも一際太い幹を持つ大樹の前に立った。周囲には無数の樹木の精が妖精使いの顔を窺おうとしていたが、妖精使いの視線を投げかけられてすかさず木々の間に姿を隠した。樹木の精は大体が恥ずかしがりやなのである。

「『風』、何かねえか？」

ただの人間である妖精使いには、この大樹の上まで見通すことは出来ない。だが、空気の妖精たる『風』は軽々と大樹の幹に沿って飛び上がり、辺りを見渡す。やがて、「あれかな」と呟きながら妖精使いの前に下りてきた。

「そんなに高くない枝のところに、何か引っかかっている。瓶みたいな」

「それだ。落とせるか？」

「やってみる」

そおれっ、と声を上げて『風』が腕を振り上げる。実体のない『風』が物体に触れることは出来ないが、周囲の空気を操ることで物を動かすことくらいは出来る。巻き起こる突風に妖精使いが目を庇う。直後、小さな音と共に妖精使いの足元に何かが落ちてきた。

目を開けてみれば、それは確かに瓶だった。コルクで封をされた瓶の中には、巻いた紙が入っているように見えた。

妖精使いは恐る恐るそれを手にとって開けてみようとしてみる。魔法の封はされていなかったようで、あっけなくコルクは瓶から引き抜かれ、紙が妖精使いの手の上に滑り落ちる。

「何？ 何か書いてある？」

興味津々といった様子で『風』が妖精使いの手元を覗き込む。妖精使いはそっと、紙を切ったり折ったりしないように気をつけて、ゆっくりと紙を開いていく。

そこに描かれていたものは――

「これ……船？」

そう、船だ。

だが、海を行く船ではない。海は海でも、風の家を行く船……飛空艇。蜻蛉のような長い翼を持つ、美しいフォルムの船が紙一杯に描かれていた。否、ただ船の絵が描かれているだけではない。どのように翼や胴体部を作るのか、翼の角度は何度か、プロペラをどう設置するのか、動力は何をどのように用いるのか、その全てが手紙と同じ筆致で事細かに書かれている。

つまりは、飛空艇の設計図だった。

「すごい、ここまで綺麗で完璧な設計図、初めて見たかも」

飛空艇に詳しい『風』が思わず嘆息するくらいだから、素人の妖精使いが「凄い」と思ったのもあながち的外れではなかったのだろう。手の中の設計図は精緻を極めていた。今にもこの紙から飛び立ってしまいそうなほどに。

「だが……こんなもん、俺にどうしろって」

戸惑いを言葉にしかけて、気づく。

瓶の中には、もう一つ二つ折りになった小さな紙が入っていた。開いてみれば、それは妖精使いに宛てた手紙の続きであった。『風』が横から覗き込む気配を感じながら、妖精使いは海色の目で印刷と見紛う筆跡を追う。

これが、最後の願いだ。

この船を、お前の手でアイツに届けて欲しい。

どうせお前は下らない理由でアイツと顔を合わせられていないだろう。これを機会に、アイツのところに顔を出してやれ。アイツも、それにお前も本当はそれを望んでるはずだしな。最後のお節介とでも思ってくれ。

妖精使いはたまらずぐしゃりと手紙を握りつぶし、虚空に向かって叫んだ。

「――っ、俺は、手前のそういうところが嫌いなんだよ！」

虚空から、けらけらと笑う陽気な声が聞こえた気がしたけれど、妖精使いはその幻聴を振り払って、再び封をした瓶を強く握りしめる。

「行くぞ、『風』！」

「でも、やっぱり届けるんだ……」

「うるせえ！ これで本当に最後だからな、次はねえからな！」

答えなど帰ってくるはずも無いというのに、妖精使いは空に向かって叫ぶ。

けれど、本当は次がないことくらい、妖精使いだってわかっている。この手紙の書き手が嘘をつかないことは嫌というほど知っている。あの男が「最後」と言ったら、絶対に最後なのだ。

絶対に、最後なのだ。

「どうしたの、急に黙っちゃって」

「何でもねえ。何でも、ねえよ」

妖精使いは、何ともいえない表情になって空を見上げる。空にこの手紙の書き手が浮かんでいるはずもなかったが、自然と空を見上げてしまう。頭の中に、手紙の最後に書かれていた短い言葉を思い返ししながら。

それじゃ、これで本当にさよならだ。

――どうか君よ、幸せに。

「永遠にさよならだ、この幸せ者」

02：竜王遊び

ある日の、ある町の、とある酒場で。

レベントートの妖精使いは、眉根を寄せて目の前に置かれた色鮮やかに塗り分けられた立体的な盤面と、その上に並ぶ白と赤の駒を睨みつけていた。そして、妖精使いの正面に座る貴族然とした男は、妖精使いとは対照的に何処までも悠然と微笑んでいた。

双竜碁——楽園では一般的な遊戯だ。「森」、「山」、「海」などいくつかの種類が存在する「戦場」を組み立てて作られた盤面に、「王」を頂点とした「軍」を模した駒を展開する。そして、一つ一つ特徴の違う駒を動かし、相手の「王」を取ることを目的とした、一对一の遊戯である。

これが単なる遊戯なら、これほど頭を悩ませることも無いのだが。

妖精使いはがしがしと頭をかいた。酒場に集った客からの、期待と逆らいがたい圧力に満ちた視線が背中に刺さる。当然だ、この一戦には妖精使いを含めたここに集う客、全ての金が賭けられているのだから。

これは、所謂「賭け碁」なのだ。

賭け事は得意な妖精使いだが、それはあくまで骨牌など——要は、イカサマが可能である遊戯——に限る。別段イカサマをしなくとも弱いわけではないのだが、勝とうと思うなら迷わず卑怯な技も使うのが妖精使いである。騙される方が悪いのだ。

しかし、双竜碁は純粋な頭脳戦、得意の手妻は通用しない。

思わず、溜息が漏れる。

ただ、そもそもの原因は、自分がこの男に興味を持ってしまったという点にある。荒くれが集う場末の酒場には珍しい身なりの良い男だということもあつたし、それでありながら妙に場慣れしているような態度も気になった。

そして……何よりも、集う男たち相手に双竜碁を仕掛けては、見事な腕で相手を打ち負かし、有り金を全て奪っていく鮮やかな手際に見とれてしまったのだ。

そこで、この男と目が合いさえしなければ。周囲の連中の、今にもこの男を殺しかねんばかりの負の情熱が、こちらに向けられさえしなければ。しかし、妖精使いは逃げられなかった。逃げる間もなくこの席に座らされ……今に、至る。

「もう、馬鹿だなあ。『双竜碁なんてやったことない』とでも言えばよかったのに」

肩の上に舞う『風』が呆れた声を立てる。「まあなあ」と口の中で答えて、更に溜息。ただ、やれるか、と聞かれて「やれない」と答えることが出来ないのは、それこそ無駄で余計な男の矜持、と言う奴なのかもしれない。

「一応、勝負の前に確認させてくれ」

妖精使いは低い声で言う。これは、目の前の男に、というよりは周りの連中に聞かせるための言葉だ。

「お前が勝ったら、俺の有り金全部持っていく。俺が勝ったら」

「私が今までに持っていったものは全部チャラにしてあげるよ。それに加えて、私の持ち金を全て君に差し上げる。問題ないね？」

妖精使的には大問題なのだが、周りの連中はぎらぎらとした目で頷くばかり。妖精使いにしか聞こえない『風』の「やれやれ」という声が、やけに耳に付いた。

「さあ、君が先手だよ」

男は紅玉のような瞳を細めて、妖精使いの緊張など知ったこと無いと言わんばかりの軽い口調で言い放つ。

さて、どうするか。

双竜砦はそこまで複雑な遊戯ではない。難しくないからこそ、奥が深いのだ。勝てないまでも、どうすれば周囲の殺気立った連中を納得させる程度の勝負が出来るか、そんなちょっと消極的な考えを巡らせていた時、不意に頭上から声がかかった。

「面白そうなことやってんじゃん、羨ましい」

ぱっと顔を上げると、ちょうど妖精使いの頭の上から盤面を覗き込むようにして、奇妙な影が立っていた。

空と海の境を思わせる青色の法衣で全身を覆い、顔もフードでほとんど隠してしまっている。そのため、それ自体がまるで青い影法師のように見えなくも無い。フードから覗く薄い唇はニヤニヤと笑みを模り、至極愉快そうだ。

わ、と『風』が驚きの声を上げる。妖精である『風』ですら、この影の存在に今まで気づかなかったのだ。

「……暇なのか、カミサマ」

妖精使いは、そんな影の顔を見上げて呆れた声で呟いた。すると、カミサマと呼ばれた影はけたけたと笑って、酷くざらついた声で言った。

「暇なのよ、カミサマ」

カミサマ。いつも妖精使いの側にいる『風』とは異なり、ごく稀に妖精使いの前に忽然と現れる「何か」だ。妖精と同じで普通の人には見えない。ただ妖精である『風』に言わせてみれば自分たちのような妖精とも全く異なる存在だという。

故に、妖精使いはこの青い影を「カミサマ」と、楽園には無い音で呼ぶ。

一体アイツは何と喋っているのだ、と周囲の人々の視線が微かに訝しむようなものになる。とはいえ、妖精使いが『レベントートの妖精使い』であることは誰もが承知しているため、それ以上の追及は無い。

相手の男にも『風』やカミサマの姿は見えないのだろう、少しだけ不思議そうに首を傾げている。

そして、空気を読む、という素晴らしい言葉を知らないらしいカミサマは、妖精使いにしか聞こえないうきうきとした声で言った。

「困ってるなら、俺様が知恵貸そうか？」

「は？ お前が？ ……いや、そうか。お前は得意そうだな、こういうの」

「そうそう、なのに皆俺様と打つの嫌がるからさあ。な、この子超強いんだろ、勝負させろよ」
——そりゃ嫌だろ、未来が見えるカミサマと勝負するなんて。

妖精使いは苦笑しつつも「ま、ありがたくお任せしようか」とカミサマに言って、それから相

手に向き直る。

「悪い、ちょっと今ここに知り合いが来ててな。こいつ、すげえ双竜砦が得意だから勝負させろって言うんだが……代わりに打ってもらって構わんか？」

「へえ、それは面白そうだね。賭けの条件は変わらないけど、それでもいいなら構わないよ」

「ありがたい。じゃ、頼んだぜ、カミサマ」

「はいよ」

言って、カミサマはろくに盤面を見ないまま、下手くそな歌を歌うように妖精使いに駒を動かす指示を与え始め――

やがて、妖精使いの白い駒が、相手の赤い王を追い詰めた。

「おや、詰んでしまったね」

相手が苦笑と共に「私の負けだ」と宣言する。その瞬間、固唾を呑んで盤面を見守っていた周囲の男共がわっと沸いた。妖精使いが顔を上げてカミサマを見ると、背の高い青い影はへらへらしながら言う。

「もう一手先を読まれてたら危なかったわあ。なかなか楽しかったぜ？」

「……って、こいつは言ってる」

妖精使いは嫌々ながらもカミサマの言葉を相手に伝えると、相手は微かに肩を竦めた。

「いやいや、まるでこちらの手が完璧に見透かされてるようで、全く歯が立たなかったよ。それにしても、とても楽しい勝負だった」

さて、負けは負けだからね、と立ち上がった男は、酒場の男たちから奪った金を遠慮なくばら撒いた。その瞬間、酒場はものすごい騒ぎになった。自分が失った分よりも多くの金を手に入れようと躍起になる愚かな男たちを横目に、妖精使いはぐったりと机の上に突っ伏す。

「あー、何か疲れた」

「君は、彼らの仲間には加わらないのかい？」

「別に金が欲しくてやってたわけじゃねえし」

金なら、それこそイカサマ賭博でもすりゃいくらでも稼げるからさ、と呟くと、横に立っていたカミサマが嫌そうな顔をした。このカミサマ、ふざけた態度を取る割には妙なところで生真面目なのである。

男はふっと笑うと、「それでは、君にはこれを」と胸のポケットから何かを取り出して、妖精使いの手に握らせた。妖精使いはそっと手を開き、そこに載せられたものを見た。

『風』がわあ、と声を上げる。

「きれーい。これ、駒だよ」

竜を模った駒……双竜砦の「王」だ。透き通った紅の石を切り出して作ったのだろうか、握てみると見た目よりも重く感じられる。竜の姿は普通の駒よりもずっと細かく彫られていて、今にも動き出しそうだ。

「どの程度の価値があるかはわからないけど、珍しいものではあると思う。是非持って行ってくれたまえ」

男は机の脇に立てかけていた杖を手に立ち上がる。そして、優雅な足取りで靴音を鳴らしながら、なお騒然としている酒場から立ち去った。それがあまりに自然な所作だったため、妖精使いは引き止めることも忘れて呆然と見送ることしかできなかった。

「なーんか、変わった人だったね」

『風』が首を捻って言ったことで、妖精使いもやっと我に返った。

「お金が欲しくて賭けしてるのかなーって思ったけど、負けたら簡単にばら撒いちゃうし。何でこんな賭け砦なんて仕掛けてたんだろ」

「ま、金持ちの高尚な暇つぶしだろうな」

そう答えたのは妖精使いでなく、カミサマだった。

「蜃気楼閣の竜王様も、俺様に似て随分お暇と見える」

「確かに暇人のすること……って、ちょっと待て、竜王って！」

カミサマはくつつと声を漏らす。

「あれ、わかんなかった？ あんな綺麗な赤い目をしてるのって、それこそ竜王の血族くらいでしょうに」

存在しない都、裏切りの国、蜃気楼閣ドライブ。実際には海の底に行く機巧要塞であるドライブ王国を治めるのは、楽園の秘密を知る赤き瞳の一族『竜王』。そのくらいは、妖精使いも知っている。知っているが……

カミサマは愉快そうな声を立てて笑いながら腕を組み、こつこつと細い顎を無骨な指で叩く。

「ま、元々黙って海の底に眠ってるようなお方じゃないもんねえ。それとも、竜王様が出張るだけの事件でも起こってるのかしらん」

いや、そんなことはどうでもいい。

それよりも、

——今の竜王って、確か「女」じゃなかったか。

何処からどう見ても男にしか見えなかった遊び人——竜王の姿を思い返し、妖精使いはもう一度、手に握った王の駒を見つめてしまった。

「頼む、『風』！」

「はいなっ」

レバンタートの妖精使いは腕を伸ばし、『風』の手を掴む。実体の無い妖精の腕を掴む、というのは正しい表現ではないが、まさしく妖精使いは『風』の手を取るような形で跳躍した。『風』は妖精使いを抱くようにして、その体を風の海へと巻き上げる。

そして、次の瞬間。

巨大な腕が、一瞬前まで妖精使いが立っていた地面に叩きつけられた。

「うわー、あれ当たったら挽肉じゃん」

「うるせえ、怖いこと言うな」

実体が無いからこそ『風』ののんきな言葉に、妖精使いは頭を抱える。

眼下の岩場に立つのは、巨大なゴーレムだ。どのくらい巨大かといえば、妖精使いを三人縦に並べてやっと同じくらい、といったところだろうか。

そして――節々から魔力の煙を吐くそれは、明らかに禁忌の技術をもって作られた、機巧人形であった。

『魔道機兵』と呼ばれるもので、古くは大戦時にレクス帝国が使用したと記録されている。ただ、その時に使われた魔道機兵は、どちらかといえば機巧というよりは初歩的な魔道機関に近いものであったようだ。当時は、それですら禁忌とされていたのだが。

現在の『魔道機兵』は、それこそ全てが精緻な機巧によって作られ、その動力源が魔力によるものを指すことがほとんどだ。妖精使いの目の前に立ちはだかるこれも、「存在しない」筈の禁忌の技術で作られたものの一つであることは、間違いない。

「こんなデカブツ作ってる暇があんなら、もうちょっと世界に貢献出来るものを作れ、つつの」

妖精使いは毒づきながらも、空の上から目を凝らす。彼の瞳には、人には見えぬ妖精や精霊の姿が見える。だが、彼らは金属、ことに機巧に多く使われる鋼を嫌うため、ゴーレムの周囲には妖精たちの姿がすっかり見えなくなってしまっていた。

「つつあー、不利すぎだろ、俺！ わかってたけど！」

彼の「魔法」は、特定の妖精と契約しない代わりに周囲の妖精に協力を求めることで初めて「魔法」として成立する。逆に言えば、妖精がいなければただの人、ということでもある。

「わかってたなら、どうして戦う気になったのさー」

唯一、禁忌機巧を前にしてもけろっとしている『風』が、呆れ顔になる。

「逃げちゃった方が早いつて。今からでも逃がしたげよっか？」

ひゅう、と。風が耳元で鳴る。微かに草の香りを含んだ温かな南風。『風』は見た目こそ少女のような姿をしているが、風の妖精の中では格別の力を持つ。「空飛ぶ魔法」が存在しない楽園において軽々と妖精使いを空に舞わせていることから、『風』が特別な妖精であることはわかる。

そんな『風』にかかれば、もちろんこの場から逃げることは簡単だろう。風は決して掴めないもの。「掴ませない」ことにかけては右に出るものはいない。

だが、妖精使いは小さく首を横に振った。

「や、見つけちゃったんだ、ついでに仕留めちまいたい。それに、放っておきゃ無駄な被害も出るだろ」

妖精使いはついと視線を麓の村へと走らせる。それなりに村からは距離があるものの、これだけ素早い動きをするゴーレムだ。下手をすれば、このまま一気に村に攻め込まれ、取り返しの付かない被害をもたらす可能性がある。

禁忌機巧に正しく対処出来る者など、それこそ神殿の異端審問官、影追いくらいなのだから。

「それにしたってさあ、アンタが戦う義理は無いんじゃないの」

「義理はねえな。ただ、鬱陶しいことに『因縁』はあんだよ」

含みのある言葉を呟いて、妖精使いは視線をゴーレムに戻した。今まではあえて華麗に無視していたが、ゴーレムの頭には人が乗っていた。元々人が乗るために設計されているのだろう、さながら飛空艇の操縦席のごとく、仰々しい計器が所狭しと置かれている。

そして、ゴーレムの操縦桿を握った男は、空を舞う妖精使いを見上げ、高笑いを上げていた。そりゃあもう、景気よく。

「はっはっはっは、怖気づいたか、愚かな女神の僕！ 我ら『エメス』が造り上げた機兵こそ、最も美しく、最も気高く、最も力強い！ まさしく、楽園の頂点に立つ存在なのだ！」

「因縁って……あれと？」

『風』は高笑いを上げる男を遠慮なく指差して、問うた。妖精使いは重苦しい表情で「遺憾ながら」と首を縦に振った。

『エメス』とは、禁忌の担い手、異端研究者で構成される秘密結社だ。もちろんこの機兵にも、『エメス』の歯車と剣と杖を重ね合わせた紋章が刻まれている。

要するに、この高笑い野郎は『エメス』の一員であり……誠に遺憾ながら、妖精使いはこの男を一方的によく知っていた。

妖精使いは小さく舌打ちをして、声を張り上げる。そうしなければ、『風』が纏う風に流されて、声が届かないのだ。

「怖気づいたんじゃないやねえ、呆れただけだ！ それに、頭がいねえ『エメス』なんざ、単なる烏合の衆じゃねえか！ 何が楽園の頂点だ！」

その瞬間、遠目にもわかるくらい、男が表情を歪めた。だが、何も怒りに歪んだわけではない、大切な螺子が完全に吹き飛んでしまったかのような、更なる笑みに顔を歪めたのだ。

「ははは、そう、その通りだよ！ だからこそ、我々は待ち続けるのだ！ 『機巧の賢者』ノグ・カーティスが我らの元に戻ってくる、その素晴らしき日を！ そしていつか我らの前に現れる『賢者』のためにも、歩みを止めることは、出来ないのだっ！」

灰色の髪を振り乱し、狂ったように笑う男の手が、操縦桿の横にある大きなボタンを押した。その瞬間、ゴーレムの目に当たる部分から真紅の光線が放たれ、妖精使いの浮かぶすれすれを掠めた。

「……つぶねえ！」

くるり、と妖精使いは空の上で宙返りをして、『風』に言う。

「行くぜ、『風』。でっかい一撃、ぶちかましてやれ」

「りょーかい。それにしても、あの人、完全にぶっ飛んじやってるねえ。目がまともじゃないよ」

『風』の言うとおりに、男はもはや妖精使いを見てはいなかった。ゴーレムがもたらす破壊の力に感涙し、そして『機巧の賢者』の名を何度も、何度も呼ぶ。そこに『賢者』はいない、どこにもいないというのに、男は何処までも楽しげに見えない『賢者』を呼び続ける。

妖精使いはほんの少しだけ苦笑する。呆れたように、もしくは「哀れむように」。

「指針を失うってことは、こういうことなんだろうな」

必ず北を指す禁忌の磁針のごとく、『エメス』のみならず全ての異端に歩むべき道を示してみせた『機巧の賢者』——ノグ・カーティスが完全に消息を絶ってから、数年。

取り残されたある者は『賢者』の不在を嘆き、ある者は一転して『賢者』を罵倒し、そして。

「こいつは、現実を認められないあまりに、頭ん中が愉快になっちまったんだ」

皮肉交じりにそう呟いて、暴風を纏った妖精使いは短刀を手に空を蹴る。暴風は彼の体を中心にして収束し、全てを貫く一振りの槍と化す。

おおおう、と、男とゴーレムが吼える。

その声を遠くに聞きながら、妖精使いは空を蹴った勢いそのままに、風の槍をゴーレムのどてっ腹に叩き込む。

腹に響く鈍い音と共に、金属で出来ているはずの巨体に穴が開く。次の瞬間、その穴から爆発的に魔力があふれ出した。その巨体を満たす魔力が抜けてしまえば、どんな凶悪な機兵もただの人形だ。緑の煙に巻かれながら膝を突くゴーレムの前に、妖精使いはゆっくり降り立つ。

槍を形作っていた『風』が、元の少女の姿に戻ってにっこりと笑う。流石相棒、と軽く腕を上げて妖精使いもそれに応える。

すると、頭上からばらばらばら、という奇妙な音が聞こえてきた。見上げてみると、ゴーレムの頭が胴体から切り離され、いつの間にかその頂点からはプロペラが伸び、空に浮かび上がっていた。

「はっはっはっは！」

たがの外れた笑い声が響き渡る。

「それで我らの希望が潰えたと思うなよ、女神の狗よ！ 『エメス』は滅びぬ、楽園が女神の嘘に満ちている限り、『機巧の賢者』の下に、我ら『エメス』は嘘を暴くことを止めないだろう！」

何かどっかで聞いた悪役の台詞だな、と思いながら、妖精使いは高笑いを上げながら飛び去っていく男を見送る。きっとまた厄介なものを作って人に迷惑をかけるのだろうか、と思うとちよっと重たい気分になるが。

「ま、どんな形であれ、愉快なことはいいことかもな」

それが、たとえ狂気から来るものであろうとも……当人が愉快なら、それはそれでいいのかもしれない。あくまで、それは当人だけに限った場合、だが。

何となく割り切れない気持ちを抱えて空を見上げていた妖精使いだったが、不意に『風』がつんつんと袖を引いたことで我に返る。

「ねえ、ちょっと」

「あん？」

「これ、やばくない？」

『風』がそっと、倒れたゴーレムを指す。何やら、ぱちぱちと爆ぜる音がする。内部の回線が切れて、電気が漏れているのだろう。ぱちり、と音がするたびに、周囲の魔力が反応し、小さな炎を生み出している――

その瞬間、ゴーレムの残骸が、盛大に爆発した。

04 : アクアマリン

ユーリス神聖国東端の港町、レベンタート。

そこまで大きな町ではないが、穏やかな気候と豊かな自然が育んだこの場所は、常に人々の活気で満ちている。自然と人々の気持ちも明るくさせる、そんな土地柄なのだ。

が、そんな人々の中で、場違いに不穏な表情を浮かべて歩く一人の男がいた。いや、男というよりは「少年」と言った方が正しいかもしれない。ドワーフ特有の小さな体を更に丸め、その瞳には暗く、かつぎらついた光が宿っている。

彼の名は、バジル・エーベル。

自らを『オグルクの妖精使い』と称する精霊魔道士だ。彼はここレベンタート出身である楽園最強の妖精使い——『レベンタートの妖精使い』をこてんぱんに叩きのめし、妖精使いの頂点に立つことを願う、夢見がちな少年であった。

が、当のレベンタートの妖精使いはバジルを鬱陶しく思いこそすれ、その目的に興味は無い。そもそも妖精使いからすれば「最強」などという称号は周囲が勝手に呼ぶもので、静かに旅をしたい彼にしてみれば迷惑なだけの称号なのだから、勝手に持って行け、ということらしい。

もちろん、勝手に最強を名乗って満足するはずもないバジルは、卑怯な手も用いて何度もレベンタートの妖精使いとやり合い、妖精使いは妖精使いで勝負となれば負けず嫌いなものだから、その度に逆にバジルをこてんぱんにのしてきた。そして、バジルはその度に再戦を誓い、レベンタートの妖精使いを追い回すわけである。

そんな、子供の喧嘩さながらの不毛な勝負は、既に数ヶ月に渡って続いている。バジルも、このままでは埒が明かないと思い——相棒の妖精ヘルガを伴って、ここレベンタートにやってきた。

「ふふふ……ここで奴の弱点を聞き出し、今度こそ奴をやり込めてやる……」

基本的に正攻法で勝とうとは思わない辺りがバジルのバジルたる所以である。妙な策を弄するが故に妖精使いの逆鱗に触れ、勝負そっちのけでぼこぼこにされた経験もあるのだが、懲りることはない。

懲りたら、それはバジルではない。

とりあえず、バジルはレベンタートの妖精使いについて情報を収集しようと試みた。相手は傍若無人にして傲岸不遜なチンピラ妖精使い、きつととんでもない評判が聞けるに違いない。そう信じて商店街で聞きこみを始めたバジルだったが、

果たして、「とんでもない」評判を聞くこととなった。

「ああ、カイル君のお友達かい？ カイル君は元気でやってるのかね。フローウェンさんが心配してたよ」

「あの子は、風を読むのが得意でね。あの子のおかげで皆も安心して漁に行けたんだよ」

「遠くの町で悪い人たちを懲らしめたって噂も流れてるよ。流石だなあ、フローウェンさんの子は」

「カイル兄ちゃんは、何でも知ってて、僕らに色んな話してくれるんだ！ 今度帰ってきたら、蜃気楼のお城の話をしてくれるって言ってた！」

——果たして、『レベンタートの妖精使い』カイル・フローウェンは、地元では「とんでもない」人気者だった。

バジルは、話すだけ話して去っていく町の人々を呆然と見送って、ぽつりと呟いた。

「……奴、カイルというのか」

実は、妖精使いの名前すらここに至るまで知らなかった。レベンタートの妖精使いはレベンタートの妖精使い。それ以外のことは何一つ知らなかったのだ、と今更ながらに気づいた。

バジルの腕に巻きつくような形で寄り添うヘルガも、きよとんとした表情で首を傾げている。だが……これでは、駄目だ。妖精使いの鼻を明かすためには、何としてでも彼の弱みを握らなくてはならない。

ありがたいことに、先ほどの人々から「フローウェンさんの家」を聞き出すことは出来ていた。代々この町の漁師であるフローウェン氏の住む家は、海沿いの白い壁の家だった。庭は広く、ユーリス神聖国特有の色とりどりの花が咲き乱れている。樹木の妖精であるヘルガがぱっと顔を輝かせたことから、豊かな土地であることはわかる。

そして、花に水をやっていた、初老の女性がふとバジルに気づいたのか顔を上げた。バジルが軽く挨拶をして名乗り、カイル・フローウェンの知り合いだというと、女性はすぐにバジルを家に上げてくれた。どうやら、この女性が妖精使いの母、フローウェン夫人のようだった。

通された客間は、窓から差し込む光に満ちて、とても明るかった。普段、光も差さないじめついた森の中で修行を繰り返してきたバジルには、微妙に居心地が悪い。フローウェン夫人は茶を淹れると言って台所に下がってしまったため、身を竦めて椅子の上に座っているしかない。

その時、ふと、小さな棚の上に置かれた写真立てに視線が行った。そこに写っていたのは、フローウェン夫人と体格のよい初老の男性、おそらくはフローウェン氏。そして、二人の間にいるのが、車椅子に乗った一人の青年、今とさほど変わらぬ見た目のレベンタートの妖精使いだった。

風の妖精を連れて楽園を飛び回る今の妖精使いしか知らないバジルには、車椅子の上で曖昧な笑みを浮かべる妖精使いの姿が奇妙なものとして映った。怪我でもしていたのだろうか、それとも病でも抱えていたのだろうか。

それに、もう一つ気になることがある。

この他にもいくつか写真立てが置かれているが、どれも今より少し前か、今の妖精使いを写したもので、「子供時代」の写真が一つも無いのだ。普通の家ならば、今の写真はなくとも無邪気で可愛かった頃の——同時に、その当人にとっては羞恥以外の何でもない——写真をまるで遺産のように飾り続けるものではないだろうか。

最低でも、バジルの家はそうだ。

思い出したくもない家のことを考えてちよっぴり落ち込んでいると、フローウェン夫人が湯気を立てるセディニム花茶を持ってきた。淡い赤色の水面から、爽やかな香りの湯気が立つ。

「ごめんなさいね、大したおもてなしも出来ませんで」

「い、いえ、こちらも突然訪ねてしまって申し訳ありません」

何処までも丁重なおもてなしに、バジルは少しだけ後悔し始めていた。これでは、レベンタート

の妖精使いの弱点など、聞きだせそうにもない。反面、ここで退けるかという気持ちも決して消えることは無く、そんな平行線の思考に折り合いをつけるためにも、一番気になっていることを聞いてみることにした。

「あの……写真、なんですけど」

「ああ、あれは、カイルがうちに来た頃の写真ですよ」

うちに、来た。

とすると、妖精使いはこの家の子供というわけではないのか。バジルは自然と不思議な顔をしてしまっていたのだろう、フローウェン夫人は「カイルからは聞いていないのですね」と微笑んだ。

「あの子は、三年ほど前に港に流れ着いていたのです。目を背けたくなるほどに傷だらけで、いつ死んでもおかしくない、とお医者様は仰っていました」

「そんな中で奇跡的に一命を取り留めた、と」

「ええ。けれど、目が覚めた時には、自分の名前も、何処から来たのかもわかりませんでした。それに言葉もすっかり忘れてしまっていて、初めはあの子も私たちもお互いの気持ちを伝えるのにとっても苦労しましたよ」

「忘れ……記憶喪失、ってことですか？」

それこそ、「まさか」というやつだ。唾然とするバジルに向けて、フローウェン夫人は小さく頷いて言葉を重ねる。

「結局、あの子が何処から来たのかはわからないままで。ですから、私たちが養子としてあの子を引き取ったのです」

カイル、という名前もその時につけたものです、と柔和に夫人は微笑んだ。

初めはただ全てに戸惑うばかりだった記憶喪失の青年が、やがてフローウェン夫妻を「親」として慕うようになって。そうして今はフローウェン家の一員として、町の人々からも認められるようになった——その様子を想像して、バジルは何故か、小さく胸が痛むのを感じる。

「無愛想なところもありますが、本当は心の優しい子ですから。是非、これからも仲良くしてあげてくださいね、バジルさん」

「は、はあ……」

仲良くする気なんて本当はさらさら無いのだけれど、息子のことを嬉しそうに話す夫人の前では、嫌でも頷かざるを得ないではないか。

それにしても、レベントートの妖精使いにそんな過去があるとは、思いもしなかった。いや、この場合過去が「無い」、と言い換えた方がいいのかもしれないが。毎日を気楽にふらふら過ごしているだけに見えるあの男にも、何かしら、思うところがあったりするのだろうか。

例えば、記憶の彼方に消えてしまった「家族」を思うことは、あるのだろうか。

そんな風に思っていると、ぱっとフローウェン夫人が笑顔を深めた。

「そうそう、奇遇ですね。今日、そろそろカイルが帰ってくるんですよ。バジルさんも是非挨拶してやってくださいな」

「えっ！」

何と間が悪い。時にはバジルが血眼になって探しても見つからない妖精使いだというのに、何

故こんな時に限って顔を合わせないとならないのか。

いつものバジルなら、顔を合わせざま挑戦状を突きつけるところだが……フローウェン夫人の前でどんばちするわけにもいかないし、何よりこんな話を聞かされた直後に、妖精使いにどんな顔を見せればいいかなんて、わかるはずもない。

「す、すみません、ちょっと急ぎの用事を思い出しまして！」

バジルは慌てて花茶を飲み干すと、ちょっと名残惜しそうにしているヘルガを引き連れて、別れの挨拶もそこそこにフローウェン家を飛び出した。

「って、おい、お前？」

声をかけられた気がしたが、構わず首を引っ込めて駆け出す。次こそは、次こそは、と妖精使いに叩きつける言葉を考えながら、それが考える側から溶けて消えてしまうような、そんな不可解な感情を抱えて。

見覚えのある姿が自分の家から飛び出してくるのを見て声をかけたのだが、どうやら声は届かなかったらしい。母がひよいと顔を出して、「おかえりなさい」と柔らかな声を投げかけてくれたことで、やっと「帰ってきた」という実感が湧いてきた。

深く被っていた帽子を外し、「ただいま」と微笑む。

それから、先ほど走っていった影について聞いてみると、母が「何だか、用事があるんですけど。もう少しのんびりしていけばいいのに」と不思議そうな顔をした。

流石に望む望まないに関わらず長い付き合いである彼には、それがあのオグルクの妖精使いの「言い訳」であることくらいはわかったけれど。

「はあん……相変わらず変な奴だな」

カイル・フローウェンは微かに首を傾げて――

彼を「生み出した」海と同じ色の瞳で、去り行くバジルの後姿を見つめていた。

05：人魚姫

「——人魚姫は、姉からナイフを手渡された。そのナイフで王子を刺せば、お前は海の泡になることなく、人魚として海に戻れるのだと。

だが、人魚姫は結局ナイフを海に捨て、そして自らも海に身を投げた。

このまま、海の泡になると思われた人魚姫だったが、気づけば自分の体は海の中でなく、空の上にあると気づいた。周囲には、美しい姿をした透き通った女たちが微笑みかけている。

こうして人魚姫は空気の精となって、世界を循環し続けることになった。そして三百年の時をかけて、新たなる命となるその日を待ち続けているんだとき」

これで物語は終わり、とレバンタートの妖精使いは言って改めて煙管を啜えた。紫煙が風に揺らめき立ち上る。

岩の上に寝そべっていた人魚は、「興味深い話じゃない」と血のように赤い唇を笑みの形にした。妖精使いは普段どおりの仏頂面のまま、軽く肩を竦めてみせる。

「アンデルセンとかいうおっさんの作り話だけだな」

「作り話だからこそ面白いんだよ。本物の人魚はそんな都合のいいもんじゃないさ」

「そんなもんか。ま、作り話だから面白い、ってのは一理ある」

妖精使いは答えて、海を見渡す。岩場の向こうには、どこまでも、どこまでも、青い水面と青い空が続いていて、その境界線が煙って見える。

ぱしゃり、と人魚の長い尾が水面を叩く。群れからはぐれたのだ、というこの人魚は、美しい虹色の尾を持っていた。

「そういえば……あたしもちょっと変わった話を思い出したよ。一種のおとぎ話だね」

けれど、これは実際にあった話でもある。

そう言い置いて、人魚は言葉を紡ぐ。

「昔々、そうだね、それこそ三百年くらい前の話さ。あるところに、子供のいない老夫婦がいてね。子供が欲しい、欲しいって願ってたら、ある嵐の夜に家の前に赤ん坊が捨てられていたんだ。女神ユーリス様が願いを聞き届けてくれたんだ、って夫婦は大喜び」

まあ、あの自己中の女神が本当にあの夫婦の願いを聞き届けたとは思えないけどね、と人魚は付け加えてみせる。妖精使いもそれには同意見だった。

「ともあれ、引き取り手の見つからなかったその子……女の子だったんだけどね、彼女は夫婦の下ですくすくと育った。ただ、育つにつれて、その子が普通じゃないことがわかってきたんだ」

「普通じゃない？」

妖精使いが問い返すと、人魚は「そ」と目を細めて笑う。人を魅了し海の底に沈める怪異、とされる人魚だが、それはあながち間違っていないかもしれない。ふと浮かべるその微笑みを見るだけで、心が惹きつけられてしまうのだから。

そんな、非の付け所の無い美を湛えた顔の中で、赤い唇だけが別の生き物のように蠢く。

「その女の子はね、空を飛べたのさ」

妖精使いはきよとんとして……それから露骨に眉を寄せた。

「空を？ んな馬鹿な。ありえねえだろ」

楽園の魔法では、空を飛ぶことは出来ない。正確には、魔法「だけでは」と言うべきだろう。魔法で飛べなければ、飛べる道具を作ればいい。そうやって飛空艇を作ってしまったのが、最終的に異端として処刑された『飛空偏執狂』シエル・B・ウェイヴであるわけで。

そんな簡単に飛べれば、シエルだって首を切られることはなかったに違いない。

人魚はそんな妖精使いの反応を十分想定していたのだろう、ニヤニヤと笑いながらからかうように言う。

「アンタだって飛ぶじゃないか」

「あれは『風』の力を借りてるだけ。俺が飛べるわけじゃない」

「その子も、風が力を貸してくれるんだ、って言ってたみたいだよ。ただ、アンタと違って、妖精が見えるわけじゃない。その子には、ただ『風』だけが見えていたみたいでね」

風を見る少女はやがて成人の儀を迎え、その日を機に旅に出ることになった。

周囲の大人たちは空を飛ぶことは隠しておけ、と言ったけれど、少女は飛ぶことが好きだった。風に乗って、雲を越えて、鳥と戯れる。その素晴らしさを知っていたから、旅に出てからも人の目の無いところではすぐに風に乗って空に舞い上がる。

「それを、一人の男が見ていたんだ……若き司祭にして異端研究者、シエル・B・ウェイヴがね」

わお、と妖精使いは彼には珍しく大げさに声を上げた。

「マジか。そこに繋がるのかよ」

だが、言われてみればシエルも三百年前の人間だ。話が繋がってもおかしくは無い。

「シエルはね、その子に一目ぼれしちゃったんだ。元々『空を飛ぶ』ことに命を捧げてる男だったけど、その子を見てからは……彼女と『一緒に』飛ぶことを夢見るようになったのさ」

人魚の濡れた指先が、空をなぞる。空には魚のような形をした、赤い船が飛んでいた。

「その結果は、アンタも知ってるでしょう」

「ああ……シエルは飛んだ。無骨な船ではあったけど、確かに」

こうして今に至るまでの「飛空」の歴史が始まったわけだが。

「そう、シエルは飛んだ。だが、人ってのは馬鹿なもんでね、一度高みに届いちゃうと、どんどんその先を目指そうとする。そのうちに、シエルは手を誤っちまった。そして、こう」

人魚は首に親指を当てて、すっと引いてみせた。そして、壮絶とも言える笑みを浮かべ、妖精使いに迫る。

「さて、それじゃあ、空飛ぶ女の子はどうなったと思う？」

知るはずも無い、と妖精使いは首を横に振る。

シエル・B・ウェイヴは楽園では知らぬ者なき英雄にして反逆者。だが、シエルの個人的な挿話はほとんど残っていない。シエルは己が生きてきた記録を残さなかった。何一つとして。唯一残したものは、それこそ今空に浮かんでいる飛空艇という存在そのものだ。

ただ――妖精使いも、これだけは知っている。

シエルは生涯独身を貫いたとされているが、それは大きな誤りだ。実際には、シエルの血は脈々と受け継がれている。そして、その事実は今もなお、神殿によって隠され続けている。

妖精使いは考えて、それからぼつりと言葉を落とした。

「……シェルが死ぬ頃には、生きてたとは思えんな」

「そうだね。彼女はシェルが処刑される一年ほど前に、事故で世界樹に還ったとき。けれどね」
くつつつ、とおかしそうに人魚は笑う。

「彼女の死体は、死んだ翌日には消えちゃったのさ。残されていたのは、シェルが彼女に贈ったりボンだけだったそうなのさ」

それもまた、窓から吹き込んだ風に煽られて、高く、高く、風の海の果てに飛び去ってしまったという。

「何だそりゃ」

妖精使いは眉を潜めた。そんな彼の手から、人魚は煙管を取り上げた。赤い唇が煙管を咥え、そして煙をふうと吐き出す。そんな仕草すら、まるで一枚の絵のよう。

沈黙は、波の音。

人魚は煙が昇っていく風の海を見上げ、ぼつりと呟いた。

「それこそ人魚の姫と同じように、空気の精になったのかもしれないよ」

「ああ……なるほど」

そこに繋がるのか。思いながら、妖精使いはもう一度『人魚姫』の結末を口ずさむ。

三百年もの時をかけて、風は楽園を巡る。例えば、風の生まれる場所からやってきた少女は、風の行く先に帰っていく。

そして、今は。

「さあ、あたしは行くとするかね。面白い話を有難うね、歪曲視」

「こちらこそ。っと、煙管は返せよ、それ高えんだから」

はいな、と人魚は嫣然と微笑みながら煙管を返した。人魚の手に触れられていたからだろうか、それはしっとりとしていて、やけに冷たかった。

それじゃまたいつか、ご縁があれば。

そんな古風な挨拶と共に、人魚は海の中に飛び込み、それきり見えなくなった。妖精使いはついと視線を空に向け、少しばかり湿り気味の煙管をふかしながらぼつりと呟いた。

「……こいつも、縁ってやつなのかね」

その視線の先では、いつも通りの相棒が、風の翼を広げて無邪気に手を振っていた。

よう、坊主。その格好を見るに、旅人だろう。ちょっと俺の話聞いていかないか。何、そんな長々とした話じゃあない。

俺は昔、この町で船乗りをやってたもんさ。船であちこちに荷物を運ぶ仕事をしていたんだがな……船を駆るのが海だろうと空だろうと、船乗りをやってる奴は皆、早い遅いの差はあれ必ずこう思うときがやってくる。

『楽園の果ては、どうなっているのだろう』

女神様は、楽園が海と世界樹の世界だというだけで、楽園の果てを示しちゃくれねえ。坊主も気にならねえか、海の果て、地図が途切れる場所。そこはどんな場所だと思う。海がそこで終わっていて、何も無い穴に落ち込んでいるのか、それとも超えられない壁が立ちはだかっているのか。

もちろん、確かめに行った奴がいなわけがねえ。俺の耳にも、そんな連中の話は入ってくる。だが、楽園の果てを見て「帰ってきた」奴はいなかった。

そこで、俺様は自分でそれを確かめようと思いついた。

燃えるじゃねえか、誰も見られなかった場所に行くなんてさ。

当然周りの連中は止めたがな、そんなことでこの俺の胸に湧いたもんは止められねえ。相棒――長年連れ添ってやってきた、旧型だが最高の船に乗り込んで、大海原に漕ぎ出したのさ。

漕ぎ出した、つっても実際に漕ぐわけじゃあねえ、魔道機関仕掛の船だったからな。そりゃあ、地図にも載っていない場所だ、人の手で行くにゃあ辛すぎる。魔道機関が出てくる前は、帆と櫂だけで楽園の果てを目指した奴もいるらしいがな。

旅のはじめは順調だった。晴れの日が続いていたし、風も穏やか。このまま行けば、簡単に地図の果てにたどり着けるだろう、そう、思ってたんだがな。

やっぱりそう上手くはいかなかった。

そろそろ地図の終わりにたどり着くだろうか、そんな時になって、急に雲行きが怪しくなってきた。それに、今まで快調に進んでくれていた相棒がおかしくなっちゃった。何でそうなっちゃったのかは、今になってもわからねえ。そのうちに、すっかり舵もきかなくなって、俺は荒れ狂う海の中に一人、取り残されちゃったんだ。

自分の思うとおりに動かない船は、波に揺られて何処ともわからない方向に流されていく。俺も流石に死を覚悟したね。

怖いとか悲しいとかそれよりもまず、楽園の果てを見ないままに死ぬことが悔しかった。結局、俺も「帰ってこなかった」連中の一人になっちゃう。名前も残らずに、そうやって一くくりにして語られちゃう、つてのが我慢ならなかったのさ。

そんな風に思いながら、どのくらい経っただろうな。もう水も食糧も底をついて、このまま死ぬだけだと思った時……曇っていた空の間から、一筋だけ光が差したんだ。そんな空に、何かが浮かんでることに気づいた。

段々と、そいつはこっちに近づいて来るんだ。鳥かと思ったが、鳥じゃねえ。船かと思ったが、船でもねえ。

そいつは……空を飛ぶ、巨大なクジラだった。

信じられない、って顔してんな。俺だってそうだった。空飛ぶクジラなんて、まるで子供の夢物語じゃねえか。けれどもそいつは間違いなくクジラだった。砂のような色をしたごつごつとした巨体を揺らめかせて、海を泳ぐのと同じように空を泳いでこっちにやってきたんだ。

ゆっくりと、ゆっくりと、眠っちまうような速度で泳ぐクジラを、俺は呆然と見上げることに出来なかった。もう、こんなおかしな幻まで見るほど弱っちまったのか、って自分で自分を笑いたくなかったよ。

そうしたら、な。

クジラが、こっちを見たんだ。

綺麗な、黒い瞳だったよ。馬鹿でかい体をしてんのに、やけにちっちゃい目でもって、こっちを見つめてんだ。

俺を取って食おうとしてんのかと思ったよ。あんな馬鹿でかいクジラだったら、俺みたいな人なんて海の中に漂う小エビも同然だったに違えねえ。

けど、そいつは俺を見て、それから来たときと同じようにゆっくりとした動きで、頭の向ける先を変えたんだ。さながら、船を旋回させるみたいにな。それで、俺はやっと気づいたんだ。

「付いて来い」

そう、言ってるんだって、な。

言われたって、俺の相棒はとっくにおかしくなっちまってんだから、追いかけることなんて出来ねえ、そのはずだった。だがな、俺は最後の力を振り絞って、舵に取り付いた。動け、動いてくれ、そう強く念じたよ。

すると、今の今まで眠ってた相棒が、目覚めたんだ。いつものような速さで動いちゃくれなかったが、俺の舵取りに応じてクジラを追いかけて始めた。俺も相棒ももう限界だった、だがこの背中を見失うわけにはいかねえ。

俺は震える手で舵を握り続けた。相棒も、今にも壊れそうな音を立てながら、それでも確かにクジラを追いつけた。

そして、気づけば……水平線の向こうに、世界樹が見えて、やがて陸地が見えてきた。その時には、いつの間にかクジラは消えていて、ほとんど意識を飛ばしてた俺は近くを通りがかった船に見つけられて、事なきを得た。

結局、相棒は二度と海に出られない体になっちまって、そのまま処分することになっちまった。それで、俺も海に出ることを止めたんだ。ま、海に出なきゃすることもねえからな、今はこうやって飲んだくれる毎日さ。

お、坊主、気が利くじゃねえか。ありがたくいただくとするぜ。

あれから、俺ああの砂クジラを見ちゃいねえ。だが、奴はきっと、楽園の果てからやってきて、今もどこかを泳いでるに違いない。俺は船乗りを止めちまったが、もう一度、死ぬまでにもう一度だけ、あのクジラを見たい。

あのクジラの行く先を追いかけて、いつかは楽園の果てに辿り着ける、俺は、ずっとそう信じてんだよ……

「旅人さん、真に受けちゃダメですよ」

レベントートの妖精使いに、酒場の主人がカウンターの向こうから苦笑を向ける。元船乗りの老人は、真っ赤な顔でカウンターに突っ伏し、豪快ないびきを立てている。

「この人、この辺じゃ有名なほら吹きなんですよ。道行く人を捕まえちゃ、あんな話ばかりするんですから」

「ふうん」

妖精使いは気の抜けた返事をして、席を立った。ジュースと干し果物、そして船乗りが飲んだ酒の代金をカウンターの上に置いて、「ごちそうさま」と主人に頭を下げる。主人も妖精使いに笑顔で頭を下げて「また来てくださいね」と言った。それはどの客にも投げかける言葉であっただろうが、ジュースが美味しかったのでまた来てもよいかもしれない、と妖精使いは思う。

扉を開けると、扉につけられていたカウベルが優しい音色を立てる。妖精使いは小さく息をついて、空を見上げる。

「俺は、あながちほら話でもねえと思うんだが、な」

太陽の光から目を庇うために手を翳す妖精使いの上を、当たり前のようにクジラが行きすぎる。大地に影を落とさない、この世ならざる砂色のクジラ……妖精使いの目にしか見えないそれは、誰も知らない楽園の果てを目指して、ゆったりと泳ぎ去っていった。

街角に佇む小さな画廊。

そこには一人の画家がいて、彼の手によるいくつもの鮮やかな絵が展示されている。

画家の名前はコラル・クローム。

精霊視のエルフであり、彼の瞳が見る世界をキャンバスいっぱいに広げた絵は、色彩豊かなながらもあくまで柔らかであり、現代の楽園絵画には珍しい画法ということもあり一部の芸術好きの間で話題を博している。

そして、ある日偶然彼の画廊を訪れたレベントートの妖精使いは、別段「芸術好き」とはいえない人種だったが、何だかんだでコラルの絵とコラル自身の人柄を気に入り、この町を訪れた時には必ずコラルの画廊を訪れるようになっていた。

同じ精霊視の持ち主として、彼の描く世界に何か感じるものがあつたのかもしれない。

今日もまた、妖精使いは画廊の一角に置かれた机と椅子に陣取り、コラルが出してくれた茶を遠慮なくすすって言葉を交わす。近頃の調子や、妖精使いの旅のこと、それはとても他愛の無いやりとり。

けれど、その「他愛の無さ」が妖精使いには心地よい。

旅の身である妖精使いには、「知り合い」は多いがこうやって他愛の無い話をする事の出来る「友人」はさほど多くない。その相手が妖精でなく人であるなら尚更だ。妖精使いに人見知りの気があり、しかも常に陰のある顔つきをしているというのが人を遠ざける要因ではあるのだが。

そんな妖精使いにとって、いつもそこにいて笑顔で自分を迎えてくれるコラルがとても好感の持てる存在であることは、確かだった。

「でもさ、こんな話聞いてて楽しいか？」

妖精使いは自分の話を中断して、目を細めてコラルを見る。すると、コラルは柔和な微笑みを浮かべて言った。

「楽しいですよ。僕も旅をすることはありますが、あなたのような冒険はしたことがありませんから」

「しない方がいいぞ、マジで寿命縮む」

「あはは、それは確かに困りますねえ」

冗談じゃねえってのに、と唇を尖らせる妖精使いに対し、コラルはけらけらと心底愉快そうに笑う。始めはぶすつとしていた妖精使いだが、やがて自らも笑みを浮かべていた。

どのくらい、そうしていただけるか。皿の上に載せられたクッキーが消え、コラルは「何か持ってきましょうか」と奥に消えた。そして、コラルが戻ってきた時には、妖精使いの薄青の瞳は、壁にかけられた一枚の絵に向けられていた。

「その絵が気になりますか？」

茶菓子を出してきたコラルに妖精使いは「悪いな、気い遣わせて」と片手を上げて応じ、そして絵に視線を戻した。

それは、肖像画、と言えよいだらうか。輪郭が周囲の風景に溶け込むかのような淡い色使い

だが、そこに描かれていたのは、波打つ銀色の髪を持つ一人の少女だった。柔らかな筆致の中でもくつきりと際立った気の強そうな瞳をきらきら輝かせ、絵の中からこちらを見つめている。

「肖像画って、お前には珍しいなと思って」

コラルが得意とするのは、幻想的な要素を含んだ風景画だ。そこに人や妖精の姿は見られるが、それが中心として描かれることは珍しい。コラルもそれは自覚しているのだろう、「そうですね」と苦笑しながら言う。

「実はこれ、友人の妹さんをモデルにしたものなのですよ。習作なのですが、いかがでしょうか」

「綺麗だな。絵のよしあしはわからないけど、きっと、本物より美人さんなんじゃねえの？」

妖精使いは思ったことを素直に言葉にした。元より妖精使いは言葉を飾るのが苦手なのだ、言葉にしたことは大体彼の本心だ。それほど長い付き合いでないといえ、コラルはそんな妖精使いの性格を見抜いているのだろう、「それは妹さんに失礼ですよ」と曖昧に笑いつつも、まんざらでもなさそうだった。

「実は、大きな絵を一枚、書こうと思っているのですよ」

肖像画から目を離さないまま、コラルはぽつりと言った。

「大きな絵？」

「はい。一人の『人』を描きたいと思って。ありのままの、一人の人を。そのためにも、人を描く練習を試してみようと思ったのです」

コラルの視線は肖像画に向けられていたが、実際にはそれよりもはるか先の……コラルにしか見えない、未来の絵に向けられている。そう、妖精使いは思った。

コラルの描く絵が、妖精使いは好きだ。精霊視とかそういうものを抜きにして、純粹に。彼の筆が描き出す一つの大きな世界、彼の描く「人」の姿を見たい、そう思った。

「へえ……ありのままの人、か。それは楽しみだな」

「本当ですか？ そう言っていただけると嬉しいです」

はにかむように、コラルは笑う。妖精使いもつられるように薄く笑いながら、「それで、実際にはどんな奴を描くつもりなんだ？」と問うた。

すると、コラルは浮かべていた笑みをちょっとだけ意地悪いものに変えて――彼には珍しい表情だ――言った。

「そうですね、目の前にいる、妖精使いさんの絵を」

一瞬、妖精使いは目をぱちくりさせた。コラルは一瞬浮かべた意地悪い笑みをすぐに収め、いつも通りのふわふわした表情に戻っていた。妖精使いは一回、二回、三回とコラルの言った言葉を頭の中で反芻してから、

「はあ？ 俺？」

とすっとんきょうな声を上げた。

「ええ。きっと素敵な絵になると思って」

コラルは嬉しそうに言うが、妖精使いはぶんぶんと首を千切れんばかりの勢いで横に振る。

「前言撤回！ 却下だ！ 全力で却下だ！」

「何ですか」

「恥ずかしい！」

きっぱりと、妖精使いは言い切った。何しろこのレベンタートの妖精使い、少し変わった術を扱うために巷ではそれなりに有名だが、彼自身は有名になることをとことん好まず、近頃は顔を隠して歩くほどだ。

それもこれも、彼に言わせてみれば「そんな偉いもんでもないのに、恥ずかしいじゃねえか」ということで。

妙なところで気が小さい、それがレベンタートの妖精使いである。

しかし、コラルも妖精使いがそう言うことくらいはわかっていたのだろう、くすくすと笑いながら、「でも、もう描き始めちゃってますから」と言った。妖精使いが「何だと？」と詰め寄ると、コラルはにっと笑った。

「見ますか？」

妖精使いは、ぐっと言葉を飲み込んでしまった。

見たい、恥ずかしい、でも見てみたい。

花占いか何かのごとく「見たい」と「恥ずかしい」を繰り返して……結局、

「見せてくれ」

と、言葉を搾り出したのであった。

そこには、一枚の、巨大なキャンバスがあった。

人一人の背丈よりも高く、両腕を広げたよりも広い。そこに、炭でぎっと、絵の下書きが描かれていた。

だが……それだけでも、妖精使いはそこに何が描かれているのかが、わかった。

——海、だ。

「あなたの話を聞いていて、ずっとあなたの絵を描いてみたいと思っていたのです。あなたの旅の記録、生きてきた道を」

海、と一言で言っても、それはただの海ではない。女神の眠る海、蜃気楼の城を隠す闇の海、永遠に凍てつく氷河。いくつもの海が、一枚の絵の中に確かな濃淡をもって描かれている。

それらの海の真ん中に立つ人の影は、きっと妖精使いの姿だろう。まだ、下書きの段階であるから人の姿をした影でしかないけれど。絵の中の妖精使いは、背筋を伸ばし、遠浅の海に立ち尽くす。

ああ、そうだ。

コラルには話しただろうか、話していなかっただろうか。もし、話していなかったとしても、きっとコラルは人とは違うものを見るその瞳で気づいていたに違いない。

自分の旅は、確かに「海」から始まったのだ、ということ。

「いつか、絶対にこの絵を完成させて見せます。そうしたら」

一番に、あなたに見てもらいたい。

コラルの言葉に、妖精使いは小さく頷く。

まだ少しだけ恥ずかしくて、頬が熱くなっていたけれど。今度は躊躇うことも無く、目の前に

広がる、まだ色の無い海に向かって言った。

「ああ——楽しみだ」

「あー、もう、むかつく！ 何なのアイツむかつく！」

『風』はぎゃんぎゃんと独り言をわめきたてながら、空を蹴る。くるぶしの辺りから伸びる白い羽が、空気を捉えて彼女の体を高く高く海の上空へと持ち上げていく。空はからりと晴れ、雲ひとつ無い。春の空気は柔らかく、それだけでいい気分になりそうなものだが、『風』の気分は最悪も最悪だった。

彼女の不機嫌の原因は、相棒と些細なきっかけで喧嘩をしてしまったことにある。ちなみに、その「些細な」の具体的な内訳については、あまりに下らないためあえてここで語ることはしない。

ただ、一度喧嘩になってしまうと頑固な『風』とその相棒のことである、お互いの顔も見たくないということで、『風』は一人きりで海の上を飛んでいるのであった。

もちろん、勢いで飛び出してきてしまったのだから行く当てなどない。そもそも『風』は風の妖精である、風には自らの足を縛る「目的」など本来必要ない。気の向くまま風の吹くままに空を散歩するのが、妖精らしい振舞いというものである。

むかつくむかつく、と相棒に対する怨嗟の声を漏らしながら、見渡す限りの海を眺めてみると、不意に不思議なものが目に入った。

波間に突き出している、きらきらと光る何か……金属の、塔、だろうか。明らかに自然物ではなく、しかしこんな何処にも陸地が見えないような海の只中に建造物があるとも思えない。

『風』は一瞬で胸に溜まっていたむかつきを放り出し、その代わりに好奇心でそこを満たした。気分の切り替えが早いのも、風の妖精の特徴だ。単に気分屋なだけともいう。

塔のようなものは、そんなに大きなものではなかった。人がぎりぎり上に立てるくらいだろうか。ただし、全体が滑らかな曲線を描いているので、上に立つのも案外難しいかもしれない。

そして、斜めに傾いたシルエットの先端には、既に先客が座っていた。

これまた、海に立つ塔に負けず劣らず奇妙な男だった。

海の只中だというのに、フードのついた真っ青なローブを纏っている。その布地は柔らかそうで、海の風をずっと浴びていたら塩と水分を吸ってぼろぼろになること請け合いだ。そして、その手には長い釣竿が握られていて、揺れる水面に向かって白い糸が垂らされている。

この辺で漁をする釣り人だろうか。

『風』は思ったが、その考えをすぐに打ち消す。こんな、海の真ん中の塔で、帰るための船も無しに釣りをする馬鹿はいない。それに、よくよく見れば潮風に柔らかくはためく青いローブの裾は、空と海に溶け込んでいた。

つまり、『風』の同類……妖精使いのような一部の人間しか見ることの出来ない存在、妖精や精霊の類に違いない。

気づいてしまえば、男から感じられる気配も『風』のよく知るものだと理解できるし、その異様さもある程度納得できてしまう。それにしても奇妙な出で立ちではあったが。

すると、男が『風』に気づいたのか、不意に顔を上げた。

『風』はその男の顔を見て、思わず息を飲んでしまった。

フードの下に見えた男の顔は、顔の右側が無残に焼け爛れていた。その中心の右目も、本来眼球があるべき位置には暗い穴が開いているのみ。左目が氷河を封じたような鮮やかな色をしているだけに、余計にそのアンバランスさが際立っていた。

男は改めてフードで顔の右半分を隠し、穏やかに『風』に微笑みかけて小さく会釈した。それがとても自然な所作だったため、『風』も緊張を解いて男の横に降り立つ。

「こんにちは、お兄さん。こんなところで何してんの？」

「釣りの真似事」

男は低い声で答えると、釣竿を上げてみせた。確かに「真似事」という言葉が示すとおり、釣糸には餌はおろか針すらついていなかった。

「それじゃあ釣れないじゃん」

「だって、食べられないのに釣っちゃうのもお魚に悪いでしょ。ま、こういう無意味でだらだらした時間ってのを一度過ごしてみたいと思ってさ」

軽い口調で言って、男は慣れた様子で釣糸を水面に投げ入れた。と言っても、その先端には重りとなるものもついていないのだから、糸が波間に浮かんでいるだけになってしまっているが、構う様子もない。

『風』はしばらくその様子を見つめていたが、そもそも飽きっぽい『風』である、すぐに男に問うた。

「楽しい？」

「や、楽しかねえな。ただ、ものを考えるには、こういうなんでもない時間ってのも悪くねえとは思うよ」

男はフードの下で、片目だけの瞳を細めた。『風』は男の横に足を投げ出して座り、男の話を聞く体勢に入る。座るにも不安定な場所だが、『風』に実体は無いから座るスペースも必要ない。

「考え事、かあ。何か面白いこと考えてんの？」

「面白いかはわからねえけど、例えば……俺たちが座ってるこの場所は、一体いつどのような目的で作られた『何』なのか、とかね」

「知ってるの？」

「答えは知ってる。けど、答えを知ってても想像力が及ばねえってことはある」

男は釣竿を持たない片手で、自分が座っている金属の塔の表面を撫でた。男には『風』と違い人と変わらぬ実体があるのだろう、表面に散っていた水滴が男の指先にすくい上げられる。

「これは、遠い昔。それこそ、女神ユーリスが現れるずっとずっと前に創られたもの。人が、空を往くための船の一部だ」

「飛空艇？」

そんなものは、決して珍しくない。

『風』は思いながら空を見上げる。この空は島と島の間を巡る定期船の航路だ、今もちょうど大型の飛空艇が風の海を泳ぎ去るところだった。男もフードを片手で押さえて『風』の視線を追うように空を見上げて、それから言った。

「……飛空艇と言ってもいいけど、今俺らが思ってるもんとは違う。これは、『星の船』だ」

「『星の船』？ 実在してたの？」

『風』はすっとんきょうな声を上げた。男は「そ」と言って、もう一度いとおしそうに自らが座る塔の表面を撫ぜた。

『星の船』とは、その名の通り星の海、宇宙を往く船だ。樂園では、夜空に煌く星は女神の涙と呼ばれているが、一部の人々……主に異端研究者と呼ばれる人種……は、星が今自分たちの立っている場所と変わらぬ「星」であり、また宇宙が果てしなく広がる空間であることも知っている。

だが、そこへ向かうための方法は知られていない。遠い昔に技術が失われたとする説もあれば、そもそも星の海には進出できなかったという説もある。樂園創世以前の歴史を研究する異端研究者の間でも、宇宙の存在は認めていても『星の船』は実在しなかったという意見を持つ者は多い。

『風』からすれば人の価値観など知ったことはないが、それでも自分の手すら届かない空の高み、それよりも高い場所には限りない憧れを持つ。そして、この男も『風』と同じ憧れを抱いているのだろう、左だけの瞳を輝かせて声を弾ませる。

「『星の船』が実在したか否かは、カイルの方が詳しいはずだ。アイツは『星の船』を見たことがあるらしいしな」

カイルとは『風』の相棒の名前だ。『レベントートの妖精使い』という通称の方が有名かもしれないが。

何故この男が相棒の名を知っているのか、そんなことは問うだけ無駄だろう。知っていても何もおかしくはない、目の前の男は人に限りなく近いが人ではない。『風』の同類であるが全く違う存在でもある、色々なものを超越した「何か」だ。

それを正しく表現する言葉を『風』は持たない。

相棒ならば、きっと「カミサマ」と呼んだだろうけれど。

「俺はカイルと違って『星の船』を見たことが無い。だから想像することしか出来ない。こんなちっぽけな残骸から、闇を泳ぐ船の形を想像するのさ」

正しい想像かどうかはわからない。

けれど、想像すること、それ自体はとても楽しいことだ。

男はそう言って楽しげに笑い、もう一度釣竿を振った。風を切る音とともに、意味の無い釣糸が青い海に舞う。

『風』はそれを目で追いながら、さっさと相棒と仲直りをすることを決めた。

そもそもが下らない理由の喧嘩だ、きつとこちらから謝れば相棒も許してくれるだろう。

そして——『星の船』の話の聞こう。

心に決めて、『風』はもう一度空を見上げた。空には雲ひとつ無く、当然星の姿も見えないが、目には見えなくても星がそこにあることは『風』も知っている。『風』は男にならって、そこに一つの船を思い描く。まるで鯨のような、美しい曲線を描く銀色の船を。

すると、男が下手糞な鼻歌を歌いだした。あまりに下手すぎてメロディラインすら定かでない歌だったが、何故か『風』はそれが相棒の好きな歌であることに気づくことができた。

——私を月まで連れてって。

男の声に合わせて口ずさみ、二人は顔を見合わせて、笑った。

楽園は、広大な海の上に浮かぶ無数の島で出来ている。

広大な陸地というものに欠ける環境だからだろう、移動手段はもっぱら船と飛空艇であり、陸上の乗り物の発達は著しく遅れている。

だが、世間を騒がせた『エメス』の脅威も去った今、ユーリス神殿の立案でユーリス神聖国とライブラ共和国との間に巨大な橋をかけ、その上に魔道機関で走る巨大な列車を走らせようとしている。

そして、今年の夏にはその工事も完了するという――

レベンタートの妖精使いは、そんな他愛の無い話を垂れ流す魔石ラヂオの声に耳を傾け、その他の音を耳に入れないように心がける。

「……ですから、何が嫌なのですか？」

それでも、耳に入ってきてしまうのは少女の声。もうそろそろ「女」と呼んでもいい年齢に差し掛かっているはずだが、鈴を鳴らすような透き通った声を聞く限りはやはり「少女」と表現する方がしっくり来る。

妖精使いは「はーあ」と大げさに溜息をつく、少女の方には目を向けないまま、肩を竦めてみせる。

「何も、嫌ってわけじゃねえよ。ただ、ばつが悪いって言ってるだけだ」

「なら、一緒に来てもいいじゃないですか」

「だーかーらー、行かないとは言ってねえだろ。今はそういう気分じゃねえ、って話」

それじゃあ結局変わらないですよ、という少女の声を、妖精使いはわざと無視する。こんな進展の無いやり取りが、もう半刻近く続いている。妖精使いの横に浮かんでいる『風』は、ひとところに留まることを苦手とする風の妖精らしく、「あーきーたー」とじたばたしている。

妖精使いとしても、こんな不毛な会話を延々と続けている気はない。なかなか飲みきれなかった甘ったるい果物ジュースを一気に飲み干すと、グラスを置いて立ち上がる。少女からは視線を外したまま。

「とにかく、お前の言うことを聞く気は無い。俺は、あくまで俺の好きなように動く。それが、結果的にお前の思う通りになるかもしれない……それでよしとしてくれよ」

「むう」

少女は納得いかない、という声を上げる。まあ、それはそうだろうな、と妖精使いも微かに眉を寄せる。妖精使いの言葉は、「気が向かなければ絶対に少女の言うとおりににはしない」という意味でもある。

「どうして、そんなに頑なのですか」

「言っただろ、ばつが悪いんだ。言い換えるならば、こそばゆいんだ。わかるか」

言いながら、わかんねえだろうなあ、と妖精使いは嘆息する。妖精使いの想像通り、少女はもう一度「むう」と声を立てるが、今度の「むう」には疑問符が混ざっていた。

わからないなら、わからないでいいのだ。その方が、妖精使いとしてはありがたい。

「じゃ、俺は行くぜ。またレベンタートまで迎えに来るなよ、頼むから」

「はい、それはしません。あなたは記憶喪失ですからね」

——そういうことに、しておいてあげます。

少女は付け加えて、くすりとおかしように笑った。そこで、初めて妖精使いは少女を見た。

少女は、ゆったりとした純白の法衣を揺らして、ヴェールの下から微かに覗く、鮮やかな色の瞳で妖精使いを見つめていた。身に纏った法衣は、ユーリス神殿の中でも高位の聖職者にのみ着ることが許されるもの、に似ている。似ている、というのはそれよりもずっと美しく豪華なつくりをしている、ということである。

いくらここがユーリス神聖国首都センツリーズといえ、こんなごろつきが集まる酒場に訪れるべき人種ではないことくらい、一目瞭然。当然、客の視線は全て少女……そして、少女としつこく話を続けていた妖精使いに向けられている。

妖精使いが席を立ったのは、この居心地の悪さに耐え切れなかったから、という理由も少なからずあった。

全くしつこい奴だ、と妖精使いは思いながらも、少しだけ口元を緩める。誰の目も構うことなく、己の思うままに背筋を伸ばして立つこの少女を見ていると、ただただ面倒くさくてこそばゆくて、どうしてもぐだぐだと結論を先延ばしにしている煮え切らない自分が、酷くくだらなく思えた。

だから。

「そうだな……夏になったら、考えてみる」

「本当ですか？」

ぱっと少女が顔を輝かせる。妖精使いは「考えるだけだ」と口を尖らせる。

「俺は詭弁を弄するし嘘だつてつく。信用すんなよ」

「はい。でも、あなたが勝手に動くように、わたしも勝手に信じます」

「は、そうだな。そりゃあ確かにお前の自由だ」

妖精使いは大げさに肩を竦めて、少女に背を向ける。酒場の扉を開けると、妖精使いの横をすり抜けて、白い法衣の男たちが「やっと見つけましたぞ！」「何故こんなところにいらっしゃるのですか！」などと口々に言いながら少女の周りに群がった。そんな中、少女はけろっとした顔で妖精使いに手なんぞを振っていた。

相変わらずのんきな奴。

妖精使いは溜息をつき、通りに出た。やっとのことで外の空気に触れた『風』が「ぷはー」と息を付く。

「もう、息苦しいったらありやしない！ アンタもとっとと話つけなさいよ、ぶつぶつぐだぐだ、情けないなあ」

「あーあー、悪かったっつの」

自覚しているだけに、『風』の言葉が胸に痛い。『風』はしばらく妖精使いの心は無自覚にえぐるような言葉を並べてみせていたが、彼女のいいところは言うだけ言えばすぐにいつもの調子に戻るのだ。やがて気が済んだのか、妖精使いの顔をまん丸の目で覗き込んで、小首を傾げてみせる。

「もしかしてあの子が、前に言った子？　突然レベントにやってきて、昔の仲間に会わせようとした、っていう」

「そ。ったく、忙しい身だつてのにわざわざご苦労なこつて」

妖精使いは言いながら、振り返って通りの向こうを見た。そこに聳え立つのは、空に向かって伸びる世界樹を背景にした白亜の建物、ユーリス神殿の本殿である。もう少女の姿も、少女を迎えに来たのだろう聖職者たちの姿も何処にも見えなかったけれど……きっと、神殿に帰っていったのだな、ということくらいは想像がついた。

『風』はふうん、といいながらも首を傾げる角度を深くする。

「何か、偉そな服着てたもんね。すごい子なんだ？」

「そうだな……今の樂園では、一番偉いかもしれねえな」

そういう風には見えないし、実際あの少女はそういう柄でもないけれど。

妖精使いはその事実がおかしくて、微かに唇を歪めてみせる。

「アイツはな、『架け橋』になるんだとき」

「架け橋？」

「ああ。人と人が、下らんことで争わねえように。例えば『世界の始まり』とか『女神の嘘』とか、んな馬鹿馬鹿しいことを火種にした喧嘩を終わらせるために。アイツは、考えの違う連中との間の架け橋になるって決めて、神殿で仕事してるんだって言った」

ほ一、と『風』は感心半分、呆れ半分と取れる声を立てる。

「随分立派な心がけじゃん。アンタも見習えばいいのに」

「嫌だね、面倒くせえ」

妖精使いはあっさりと『風』の言葉を却下した。もちろん、妖精使いがそういう人間だと言うことは百も承知の相棒だ、「そりゃそうだよね」と言って空へと舞い上がる。

「さて、と。次は何処に行くかな」

「ね、橋っていえば、さっきラヂオで言った橋でも見に行かない？　あたし、遠目でしか見たことないからさあ」

なるほど、それは面白そうだ。妖精使いは小さく頷き、『風』を伴って歩き出す。

世界樹の方角から吹く香り高い風は、いつもより少しだけ早い春の到来を告げている。

そう――きっと、夏もそう遠くない。

「やあ、また会ったね……って、どうしたの？」

見覚えのある旅人に声をかけられて、レベンタートの妖精使いは返事をする代わりに一つ、盛大な溜息を漏らした。どんよりとした、それどころかどす黒い空気を漂わせながら。声をかけた男も、ちょっとまずいところに来たなあという表情を隠しもしなかった。

遅ればせながらどん引きされていることに気づいた妖精使いは、小さく首を振って答えることにした。

「ああ、悪い。実は連れと喧嘩してな」

連れというのはもちろん『風』のことだ。普通の妖精使いと妖精の関係ならば妖精は契約主である妖精使いに絶対服従であり、「喧嘩」など起こりようもないが……あくまで彼と『風』の関係は「旅の道連れ」であり、それ以上でも以下でもない。

その上、自分勝手に我の強い『風』と言葉だけ取れば乱暴な妖精使いである。一ヶ月に一度はささいなことで大喧嘩をして、『風』が何処かに消えてしまう。今回ばかりはこちらから探しに行くことなんてしないぞ、と決めた妖精使いだったが……流石に半月近く姿を見せないままでいられると、自分なんてどうでもよい存在なのだと突きつけられたようで、落ち込まずにはいられない。

妖精使いは、言葉こそ乱暴だが、実際にはとてもナイーブな心の持ち主だ。

ぽつりぽつりと語られる事情を聞いた旅人は、赤い目を細めて妖精使いの肩を優しく叩く。

「いいじゃないか、喧嘩するほど仲がいいっていうし」

「これでよく仲がいいなんて言えるな」

「腹を割って喧嘩できるだけいいさ。オレなんて、その機会も二度と巡ってこないからね」

旅人は言って、苦いものを飲み込んだような表情で笑う。その視線は遥か遠く、澄み切った風の海の前を見つめているようで……

妖精使いは、一瞬躊躇いこそしたが、はっきりと言葉を紡ぐ。

「死んだのか」

すると、旅人はゆっくりとかぶりを振って、言った。

「殺したんだ」

妖精使いは別段驚くこともなく、視線だけで旅人に話の続きを促す。それが旅人にとっては意外だったようで一瞬真紅の目を見開いたが、すぐに力ない笑みに戻り言葉を紡ぐ。

「と言っても、オレが直接手を下したわけじゃない。だけど、結果的にはオレのせいでそいつは死んだ」

「何故？」

「そうだな……当時の自分には大切な理由があって、どうしてもそいつには死んでもらわなきゃならないって、熱に浮かされたように思ってた。けれど、不思議だな。今ではその理由すら思い出せない」

ただ、自分のせいでそいつは死んだ、その事実だけが胸に引っかかって離れずにいる。

そう言って額を押しえて壁に寄りかかる男を、妖精使いは地面に座り込んだまま見上げていた

。そのアクアマリンの瞳には同情の色も無ければ、嘲りの色も無い。それこそ凧いだ水面のごとくありのままに、赤い旅人を映しこんでいる。

「忘れてしまう程度の理由で殺されたそいつは、何を思ってたんだろう。そいつには、未来があった。夢があった。それを、オレは誰よりもよく知っていたはずなのに」

それがわかるほどに、近い存在だった——最低でも、自分はそう思っていた。

妖精使いは、言葉を落とす男をただ見つめるばかり。言葉を放つことも、頷くこともせず、ただただ「聞いている」。

旅人はそんな妖精使いの瞳を覗き込んで、我に返った。もしかすると、妖精使いの瞳の中に映しこまれた自分自身を見たのかもしれない。

「ごめん、こんな話をするつもりじゃなかったんだ。ただ……オレのようにならないためにも、きちんと相棒とは話をした方がいいよ。喧嘩するにしろ、仲直りするにしろ、自分の思いを伝えなければ、何も始まらない」

——そして、「終わる」ことも出来ない。

「オレみたいに、終わらないままの物語を、胸にしまい続けることになるよ」

旅人はそう言って、寂しげに笑った。妖精使いはゆっくりと瞬きをしてから、立ち上がる。立ち上がった後も、旅人の方が頭一つくらいは背が高かったため、「見上げる」ことには変わりなかったけれど。

「それは違うんじゃないか」

妖精使いは遠浅の瞳を細めて、言った。旅人は首を傾げて「何がだい？」と問う。

「上手く、言えねえけど。何もかも、何もかも。終わらせるのは必ず自分自身だろ」

旅人から視線を逸らし、妖精使いは言葉のひとつひとつを区切って言う。

「出会いと違って、別れってのは何処までも一方的で勝手なもんだ。ここに立つ自分の視点からすれば、どんな形の別れであれ『相手が去った』ようにしか見えねえんだから」

だから……本当の意味で物語を終わらせるのは、自分自身。

それを『終わり』と定義できるかどうかにかかっているのではないか。

妖精使いは言って空を仰ぐ。その仕草を見た男が、はっとした。その横顔を、何処かで見たことがあるような気がして。

「別に、終わらせないことを悪いと言うつもりもねえ。ただ、手前に関して言うならば、とっとと終わらせるに限るぜ」

「……えっ？」

杲然とする旅人の声を遮るように、ざあ、と風が吹く。海の匂いを含んだ北の風。風の中で、妖精使いは笑みすら浮かべて真っ直ぐに旅人を見据える。その瞳の色は、先ほどまでの明るい遠浅の海ではなく——何処までも伶俐で、何処までも透き通った、氷河のアオ。

「百年も二百年もくだらねえ感傷に囚われてんじゃないか、ってこった。死人に手前を縊る腕なんかねえ、己で己を縊ってんじゃないか？ 馬鹿馬鹿しい」

高らかに放たれる声すらも、一瞬前までの妖精使いとは違う。

それは、旅人の遠い記憶の中にある「誰か」の声。

「何はともあれ手前は生きてんだ。生き続けなきゃならねえんだ。それならとっとと賞味期限切れの物語なんて終わらせちまえ、そして」

とん、と。

妖精使いの手が、旅人の胸に触れる。男が見下ろすと、妖精使いは笑っていた。男の記憶のままに、何処までも自信に満ち溢れた笑みで。

「『俺』が届かなかった未来を、その目に焼き付けてこい」

「まさか……君、は」

旅人の声に、妖精使いは応えない。その代わりに、再び風が吹く。目を覆いたくなるほどに激しく、身を切るような風。けれど、何故だろう。その風の中で、高らかに笑う声が聞こえたような、気がした。

やがて、風が収まると、妖精使いが「あ？」と首を傾げて旅人の顔を覗き込んだ。その瞳の色は、先刻までのアクアマリンの色に戻っている。

「俺、何か言ってたか？」

呆然とする旅人の前で、妖精使いは目をぱちぱちさせながら軽く頭を振る。「最近、どうも調子がおかしくてな」と呟きながら。

「連れに言わせてみると、立ったまま寝てるとか、寝言言ってるとか。まったく、ぞっとしねえ」

「寝言……あれが？」

「あれって何だよ。俺、本当に変なこと言ってたんじゃねえだろな」

妖精使いは半眼になって旅人に問う。旅人は、しばし驚きの表情で固まっていたが、不意に「あはは」と笑った。その表情はやけに晴れ晴れとしたもので、妖精使いは不思議そうな顔をする。

「何だ、急に陽気なツラになって」

「いや、君のおかげで目が覚めたよ。そっか、どんな物語でも幕を引くのはオレ自身か……」

旅人は、真紅の髪を風に靡かせて微笑む。その瞳の向けられた先は、空。風が生まれる場所、そして風が還っていく場所。まるで、そこに昼の空にも一際明るく輝く星を見つけたような……妖精使いにこの男の心などわかるはずもなかったけれど、綺麗な線を描く横顔は、そんな表情に見えた。

だから、妖精使いは仏頂面に微かな笑みを載せて言う。

「ま、今そういうツラが出来るなら、上出来なんじゃねえか？ 俺はアンタの過去には興味ねえしな」

「はは、そんなもんかな。それにしても、君と話していると色々と驚かされるよ」

「それは、褒めてんのか……？」

妖精使いは複雑な表情を浮かべて見せるが、旅人はただただ楽しげに笑うばかりだった。

そうして、妖精使いは旅人と別れた。別れ際、旅人にこれから何処に行くのかと聞いてみると、旅人は『北へ』とだけ答えて、そのまま通りの向こうに消えていった。

しばらく、人ごみの中でも目立つ紅の後姿を見つめていた妖精使いだったが、その姿が完全に見えなくなると、ふうと溜息をついて空を見上げる。

「さ、俺も目下の悩みを解決するか」

そのためには、まずアイツを探さなければならないけれど。

妖精使いは大きく伸びをすると、潮風を背中に受けてゆっくりと、しかし確かな一歩を踏み出した。

レベントートの妖精使い - 海の章

<http://p.booklog.jp/book/69079>

初版：2010年5月23日

電書版初版：2013年3月31日

著者：青波零也

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/aonami/profile>

著者サイト「シアワセモノマニア」：<http://happymonomania.sakura.ne.jp/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/69079>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/69079>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ